

青森縣宗門史要

江利山義顯

青森縣は本州の最東北端、東は茫々たる大平洋に臨み、西は濤々たる日本海に面し、北は津輕海峽を挟みて北海道と相睥睨し、南は秋田岩手の二縣に連り、奥羽山脈は縣の中央を南北に縱走し、山海豐饒、馬の國、林檎の國、雪の國として其名あり。されど古來蝦夷の住地として文化遅々として進まず、従つて宗教上著しき特色無く僅に平安鎌倉の兩期に渡り、二三名僧の足跡を印せるのみ、而して宗門としては宗祖の直弟日持大聖人、海外布教の途、本縣を通過せしは、其の異數に出づるものと謂つべし。今五期に劃して其の大勢を略述せんに、第一期は鎌倉時代の永仁三年、日持大聖人海外布教出發當時に於ける宗門の教勢、並に縣下に於ける佛教の状態なるが、當時に於ける宗門の教勢を地方的に類別せんに、甲駿には日興日向日持日法日源日秀日進日賢日辨日實日傳日位、武州には日朗日源日賢、相州には日昭日朗日忍、下總には日頂日忍日合日高、上總には日向日秀、房州には日家日保、佐州には日滿、野州には天目、常州には日門等在り、専ら布教傳道に従事せられ、今正に日持聖人に

依り東北の教田を開拓せられ、日像聖人に依り王城の地に本化の妙宗を開宣せられんとするの時なり。次に縣下に於ける佛教の狀態として、最古の寺院五六箇寺を擧げんに、西津輕郡深浦村眞言宗圓覺寺は大同二年（皇紀一四六七年）阪上田村鷹將軍の開基にして、弘前市森町曹洞宗普門庵は之復古大同年間の創立なり、併し普門庵は舊茂森山嶺に在りしを、弘前城の竣工に及び、現地に移轉せられしものなり。次に下北郡田名部曹洞宗圓通寺は貞觀元年（皇紀一五一九年）慈覺大師の創立にして一名恐山と稱せらる。次に南津輕郡藏館村眞言宗大日堂は建久年間（皇紀一八五〇年）に開かれ大日如來を以つて有名なりしが、近年國寶調査會に依り阿彌陀如來と証せらる。次に南津輕郡五鄉村北中野淨土宗西光院は、建保年間（皇紀一八七七年頃）淨土宗の開祖法然聖人の直弟金光上人の開創にして、三戸郡名久井村曹洞宗法光寺は、弘安五年（皇紀一九四二年）最明寺時頼の開基たり。次に南津輕郡六鄉村高館山日蓮宗法嶺院は、永仁三年（皇紀一九五五年）日蓮宗の開祖日蓮聖人の直弟日持上人の開祖にして、三戸郡相内村時宗教淨寺は正慶年間（皇紀一九九二年）の建立なりしが、後ち岩手縣米内村に移轉せらる。今如上の寺院を時代的に區分せんに、圓覺寺、圓通寺、普門庵は平安朝にして他は悉く鎌倉時代たり。復古之を宗派上より觀るに、眞言、禪、時宗、淨土、日蓮宗等にして、舊藩時代の津輕南部の領土的區分より觀るに、圓覺寺、普門庵、大日堂、西光院、法嶺院等は津輕領に在り、

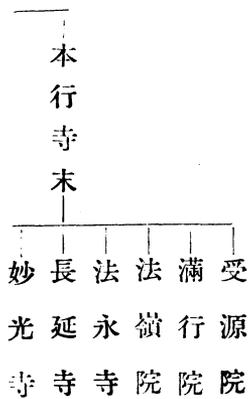
他は悉く南部領なり。第二期は天文二年日尋聖人の傳道より、慶長十五年弘前城竣功の前年にいたる七十八年間なり。京都本山本満寺塔中玉持院二世、玉持院日尋聖人奥州に下向當國に七字の法幢を高揚し、岩木山の東麓大浦城下賀田に法立寺を創立せしは、宗門三大法厄の一たる天文法亂の前四年なり。當時宗門は全力を國諫運動に傾倒し、京都を中心に其勢ひ旭日昇天、本山を擁する二十有一、爲に平安佛敎の大權威、比叡山をも將に凌駕せんとす。其の結果遂に彼の猜むところとなり、天文法亂を惹起するに至る。而して當時宗門の制度は、徒苐悉く本山貫主の附弟として本山に教育せられ、其の關係上附弟にして新寺建立の際は、總べて其の本山に屬するの狀態にありき。故に聖人本満寺塔中玉持院就職の關係法立寺の本山を本満寺に仰ぐ。當時賀田の町は延長一里に及び、城主は大浦十二代盛信公たり。此より二十四年を經、相州濱殿法華寺十二世日弘聖人の門人日境は、淺瀬石領に法輪寺を創立す。當時法輪寺は何れの本山に屬せしや不明なれど、宗門制度の上よりは、今日の玉澤末に屬すべきものなり、併し當寺は淺瀬石公没落後、黒石領の妙經寺と併合せらる。妙經寺は本行寺六世の開基なる故本行寺末なりしが、明治に至り本行寺の本山たる本圀寺末に屬す。法輪寺創立後二十五年、京都深草寶塔寺妙覺院日健聖人賀田に本行寺を開き本圀寺に屬す。寶塔寺は日像菩薩の開基、且つ開山御廟の存するところにして妙顯寺末なる故、當時の宗門制度よりは本行寺も妙顯寺末なるべき

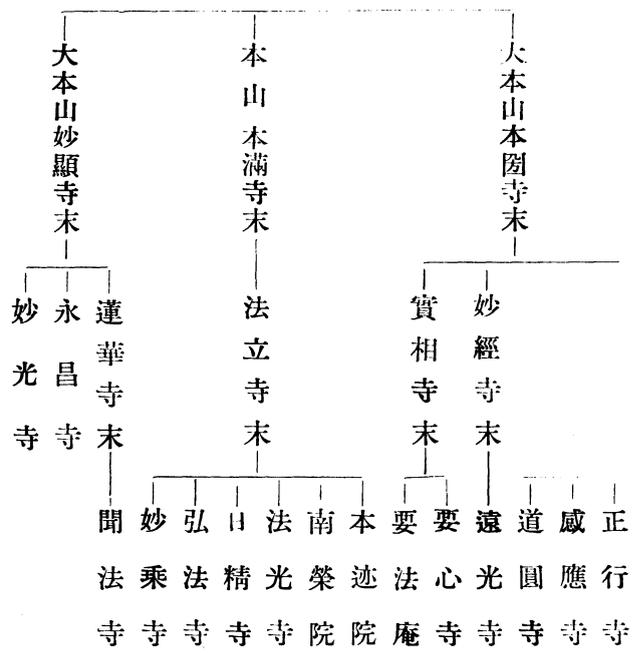
を、本岡寺に屬せしは當時の貫主日禎聖人は、近衛關白晴嗣公の猶子として、僅か十八歳にして天正六年普董せらる。而して近衛家と津輕家は深き因縁を有する關係上、本末を締結せるものと思考せらるゝなり。其後長延寺、實相寺、妙光寺、弘法寺等の創立あり、弘法寺は法立寺七世の開基なる故法立寺末に屬し他の本行寺末なるは其の因縁不明なるも、本行寺は當時當國宗門に於て、國內總錄の關係上屬せしものならん。第三期は弘前城竣功の慶長十六年より寶永七年にいたる百年間なり。今期に入り二十五年幕府始めて寺社奉行を設け、僧侶の昇進、寺院の階級等に關する律法を制定するや、宗門は寺職の資格を檀林の修學に依つて定む。茲に於て當國と最も深き關係を有する水戸檀林は、今期の末に開設せられ次期に至つて其の影響著しく現はる。弘前城の竣功は城市の擴大を要し、爲に神社佛閣は移轉に逼迫せられ、諸寺皆弘前を中心として集る。此時二代信牧公は、各宗の巨刹に總錄の權を與へ、長勝寺の曹洞宗總錄は慶長十七年にして、最勝院の眞言宗總錄、眞正寺の淨土宗總錄皆この前後なり。故に我が本行寺の本宗總錄も當代なるは至當の如し。今期に於て創立せられし寺院は、遠光寺、正行寺、本迹院、法永寺、受源院、瀧行院、蓮華寺、永昌寺、南榮院、法光寺、感應寺、道圓寺、日精寺、妙乘寺等の十四箇寺にして、此中、本迹院、南榮院、日精寺は法立寺末、感應寺、法永寺、受源院、瀧行院は本行寺末、遠光寺の妙經寺末等は當然なれど、永昌寺の妙顯寺末は甚だ不審な

り。永昌寺開山は敦賀本妙寺出身なれば、元來本門法華宗妙蓮寺配下に屬すべきものなり。而るを如何なる因縁にて妙顯寺を本寺に仰ぎしや、又正行寺は永昌寺と重大關係を有しながら、本行寺末となりし点は全く不明なり。蓮華寺は一世二世の關係よりせば當然本行寺末なるに、三世に至り妙顯寺と本末の契を結べり。次に道圓寺の本行寺末も復た不明なれど、七面大士の感得主佐々木氏本行寺檀方なる故か、最後に妙乘寺は弘法寺歴世の開基なる故、功を本寺に歸し法立寺末となりしものなり。第四期は正徳元年より慶應三年にいたる百五十七年間に於て、此間法嶺院、要法庵、要心寺の創立あり、法嶺院は妙經寺十八世の開基なる故妙經寺末、要法庵、要心寺は創立當時の檀方實相寺に因縁深きため、自然實相寺を本寺に仰ぎたるものなり。今期は前期に創設せられし制度の影響最も甚しく、現時政黨内閣に於ける地方官移動の如く、一箇寺空席となれば順次大移動を行ひ、爲に一人にして八箇寺轉ぜしものあり。其の席次の最上は本行寺にして、次席は法立寺、次は永昌寺、妙經寺、蓮華寺、なるが如し、併し此の三箇寺席次判明せざれど、永昌寺より七人、妙經寺より五人、蓮華寺より三人法立寺へ昇進せり。次に永昌寺へは弘法寺、實相寺等より、妙經寺へは弘法寺、長延寺等より、蓮華寺へは長延寺等より主として昇進し、次は受源院、本迹院、法永寺等なるが如し。斯の如き状態なれば移動の結果として、寺院の經營、寺檀の情愛、布教の發展等に就て疑はるゝも、寺院相互に於ては全

く一家の觀を呈せり。第五期は明治已降にして、創立寺院は聞法寺一箇寺のみ、聞法寺は本寺を蓮華寺に仰ぎしは、檀方もと蓮華寺に屬せしが故なり。次に本末の移動として妙經寺と實相寺は本園寺に直末となり、妙經寺末の法嶺院は本行寺に附す。今期は世出俱に一變し、縣下に於ても寺職上一大變化を現出せり。幕末の頻繁なる移動は明治に入り殆んど絶え、本行寺協師の四十年、蓮華寺角田師の五十年、妙經寺最上師の三十七年、弘法寺金師の三十二年、遠光寺盛師の二十九年は、何れも始より一箇寺に住し、長延寺三上師の三十九年、感應寺横山師の三十四年、法永寺宮本師の三十三年、實相寺津輕師の二十七年は轉任後其寺に永住す。其の結果堂宇の營繕、寺檀の親密、寺院經濟の確立、徒弟の育英等大いに充實し、檀方數も明治の初年に比し殆ど倍に近く、縣下宗門としては空前の盛況を呈せり。此の外旧南部領に妙光寺在りといへども、旧來は岩手縣に屬し、津輕寺院と殆ど沒交渉なる故今は略す。また古記に本行寺の塔中に自唱院、隆光院、妙經寺の塔中に春玉院、布江田に道久庵、夕顔關に圓通庵、新山に宣林庵等存在せしも、今は何れも皆廢去となりぬ。斯の如く縣下に七字法幢の高揚せられしは今を去る六百三十五年、寺院の創立せられしは三百九十六年前、爾來寺院の建立二十六個寺、此等の本山は本園寺、妙顯寺、本滿寺の三個寺にして悉く京都なり、爲に縣下本堂の様式は京の影響尠がらず。而してこれが中本寺は、本行寺、法立寺、實相寺、蓮華寺、妙經寺等にして、

直末は永昌寺と三戸の妙光寺等なり。此間本山に住する者三名加歴者一名、祈禱者として延山流三名中山流四名、檀林能化者として、水戸檀林二十一名、中村檀林二名、南谷檀林一名、布教監一名、宗會議員四名、宗務（現總監級）執事二名を出し、法縁としては津輕一法縁にして中央の諸法縁とは全く無關係の如し、此の中僅に本行寺協師典師法縁と稱せらるも、之れ本圀寺釋日禎師の關係にして、元來は津輕一法縁の出身なり。若し法縁は檀林より生じたりとせば、水戸法縁にして本山久昌寺並に東京小石川大乘寺と因縁深きものあり。一花開いて天下の春を知る、一地方の概觀を以つて全宗門の如何を卜するを得、幕末より明治への一大變化は、轉住より非轉住、非轉住は師資相續を事實として解決し、師資相續は他の門弟子をして未開の教田に送りて教會所の設立となり、此處に於て宗門史は、明日の宗門に對し、無文無言宗政の改革を教導しつゝあるなり。





—(完)—